

## フランシス・ライトの小説『アテネの数日』と Epicureanism

——功利主義フェミニズムの哲学的基礎として——

土 方 直 史

これまで多くの研究者は、ジェレミー・ベンサム功利主義を「エピキュリアン伝統」との連結性のなかで理解してこなかった。フレッド・ローゼンは、ベンサムの功利主義思想を17世紀以降のエピキュリアン伝統のなかに位置づけて理解することを提起している。しかし、ベンサムが自身の哲学を、エピクロス哲学から導いたわけではない。むしろ、本稿で紹介する女性哲学者フランシス・ライト著『アテネの数日』(*A Few Days in Athens*)を読む以前に、彼がエピクロスの哲学に関心をもっていたとはいえない。さらに、快樂主義と幸福の実現という主題の下、エピクロスとゼノンの論争を物語形式で展開したこの哲学的小説の思想史的評価は、ベンサムにエピクロスの哲学を紹介をした、というものにとどまらない。この作品においてライトは、後にトンブソン、オウエン、J.S.ミルらが主張するフェミニズム論の原型、すなわちエピクロスの哲学とベンサムの功利主義思想を哲学的基礎とする女性論を示したといえるだろう。

### まえがき

19世紀イギリス文学界は多くの女性作家の登場によって彩られた。18世紀末からきわだつようになった女性たちの知的活動の高揚が、まず彼女たちを作家への道を選ばせ、そこに活動の舞台を提供したからである。さまざまな社会的・政治的あるいは科学的活動への参加は、女性の歴史的・社会的な地位を反映して、一呼吸の間をあけてからのことだった。

本稿の主人公スコットランド生まれのフランシス・ライト (Frances Wright, 1795-1852) も、当時の多くの女性たちにならって作家への道を目指すはずだった。だが、別稿で論じたように、多くの女性作家のように「屋根裏部屋」に閉じこもることなく、彼女はアメリカに渡り、たった一人で黒人奴隷の解放に身を投じ、それを契機に社会改革へ自覚的に歩みすすめる。大衆啓蒙のために、講演会を開き、新聞を発行するなどジャーナリズム活動をすすめる。さらに、労働運動に積極的にかかわる。それは彼女自身の哲学や社会科学への関心をさらに広げるという結果につながった。社会的問題への多様で意識的な活動は、当時の女性としては特殊な選択だったといえる。

このような問題意識の拡大は、フェミニズムの深化にとって、不可欠な条件を整えるという意味で、まことに重要であると筆者は考えている。いい換えれば、フェミニズムの課題が、狭い意味での女性問題の枠組みを越えて、さまざまな社会問題と関連して意識化されることになり、女性自身による社会認識の進歩をうながし、はじめて体系的展開の条件を整えることが可能になるからである。

彼女が、その卓越した才能を示す哲学的小説『アテネの数日』(*A Few Days in Athens*)の執筆にとりかかったのは1817年、18-20歳のころと想定されている<sup>1)</sup>。いまではほとんど顧みられることもない作品であり、筆者はこの作品の文学的評価を下すことはできないが、ドラマ風タッチでさわやかに描かれたこの小説は、哲学史・思想史の文脈でみれば再評価に値する位置を占めているように思われる。紀元前4-3世紀のころ、ギリシャのヘレニズム哲学界の双璧とされるエピクロス(Epicurus, BC 341-271)とゼノン(Zeno, BC 335-263)との論争をテーマにし、その主題に、快樂主義は幸福の実現にとって善か悪かを問いつつ物語を展開させている。古代の道徳論を扱っているとはいえ、その後の彼女のフェミニズム論が哲学と社会科学に裏づけられることを示唆するものとなっている。

しかし、作家を志したフランシス・ライトも、女性にとっての「匿名性」の宿命を負わされていた。『アテネの数日』に出版への途が開かれるのはようやく、27歳になってからである。たまたま出会った二人の著名な人物、功利主義哲学者にして、「世界の立法者」と称されたジェレミー・ベンサム(Jeremy Bentham, 1748-1832)とアメリカ独立革命とフランス大革命の活躍によって「両大陸の英雄」と称された将軍ラファイエット侯爵(Marquis de Lafayette, 1757-1834)との交流関係を通じて、ライトは「男性社会」に受け入れられたことがきっかけだった。この背景には興味深い逸話があるが、それについては別の機会に譲ることにしよう<sup>2)</sup>。

『アテネの数日』と題した一冊の哲学的小説の初版が刊行されたのは、1822年、彼女のベンサム邸滞在の直後である。その副題には、「『アメリカの社会とマナーの考察』の著者フランシス・ライトによるヘルクラネウムで発見したギリシャ語手稿の翻訳」と記されている。さらにタイトルページに、ジェレミー・ベンサムの啓蒙的な感情、積極的な哲学を称賛し、彼の友情への感謝の証として、彼に献呈されたと追記されている。あたかも、この作品そのものがヴェスヴィオ火山とポンペイの近くの古代ローマ都市ヘルクラネウムで発見した「手稿」の翻訳であるかの装いであるが、「古代の手稿」とみせかけた「だまし」の技をしかけた遊び心で、まぎれもなく彼女の創作小説である。そして彼女自身の哲学的立場がベンサム

---

1) Morris (1992 [1984]) pp. 15-16.

2) 土方 (2019) 137-146頁。

のそれと関連していることを示唆した作品である<sup>3)</sup>。

この小説を評価するにあたって、注目すべき視点がもう一つあるように思われる。これは文学作品とはいえ、イギリス・フェミニズムの歴史にとって、ある意味で一つの画期をなす作品ではないかとの想定が成り立つように思われるからである。いま詳述はできないが、この作品を献呈されたジェレミー・ベンサムへの影響である。彼自身はライトの作品を読む以前に、エピクロスの哲学にあまり関心がなかったのではないかと、ベンサム研究の泰斗フレッド・ローゼンは想定している<sup>4)</sup>。それが事実かどうかは今後の研究を待つほかないが、ベンサム自身は、メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-1797) に先んじて、女性にも参政権が付与されるべきだと主張したフェミニストであり、ベンサムの功利主義思想を哲学的基礎とするフェミニストのグループも誕生した。ウィリアム・トンプソン (William Thompson, 1775-1833)、ロバート・オウエン (Robert Owen, 1771-1858)、J. S. ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) ら多様なフェミニストを数えることができる。フランシス・ライトもその一人に加えることができるし、その草分けの哲学者と呼ぶことも可能ではないかと考えられるのである。

なお、1822年版は全12章で構成されていたが、1826年に、ロバート・オウエンが開設したアメリカ、ルイジアナ州の「ニュー・ハーモニー・コミュニティ」に滞在しているとき、新たに4章を加筆し、全16章からなる改訂版が刊行された。したがって、作者の年齢は31歳になっていた。そして既成宗教への見解はこの加筆によって鮮明に展開されるようになった。本稿では、この改訂版を使用した。

## 1. 『アテネの数日』(1)——「エピクロスの庭」と女性哲学者

ドラマの主題となった古代ギリシャの哲学論争をフランシス・ライトがどのように作品のなかで描いているかを検討する前に、あらかじめエピクロスとゼノンの哲学の性格について、筆者の見解を示しておくことが、この作品の理解にとって好都合であろう。ヘレニズムの時代の到来について、この領域の碩学 A. A. ロングは、次のように要点を整理している。古代ギリシャでは、100年にわたる「目覚ましい知的成果」の蓄積がみられ、それを背景にして、プラトン (Plato, BC c. 427-c. 347) やアリストテレス (Aristotle, BC 384-322) らの時代が過ぎたという。人間の幸福実現にとって、ポリス (コミュニティ) を重視してきた哲学は、「公平無私の思弁から、個人の安寧の備えへとその方向を転換した」。公的生活から私生活への関心の移行が顕著になったと考えている。それは傑出した人材の教育に関心をよせていた

3) Wright (1850 [c. 1826]) Dedication.

4) Rosen (2003) p. 256n.

プラトンの哲学から、酒甕にこもって禁欲を主張した犬儒派・キュニコス派の先駆者ディオゲネス（Diogenes, BC c. 412-323）の個人主義への転換によって特徴づけられる。幸福やよき生き方に到達する方法へ関心が向くようになる。「二つの哲学体系（エピクロス派とストア派）のいずれも、幸福は宇宙と人間本性の理解に依存する」という前提を採用し、「人間の内的本性である理性がそれを保障する唯一の基盤を提供しうる」との確信をいだいていた点で共通していた<sup>5)</sup>。

ギリシャ時代の哲学者は、彼らをどのように観察していたのだろうか。ディオゲネス・ラエルティオスの著作『ギリシャ哲学者列伝』を通じて紹介しよう。一方のエピクロスは、あるがままの人間を観察すれば、生まれつき感覚的に快樂という感情をえたとき、それを肯定的に受け入れ、快樂を出発点にして、すべての選択と忌避を行っていることは明らかと考える。したがって、この感情を基準にして、すべての善が判定されるから、それを第一の善と認めることができる。個人の幸福実現にとって、人間が生まれついてもつ身体が健康の状態を保ち、身体が苦痛を感じることも、精神が恐怖にかられることもなく、平静であることこそが、至福なる生の目的と主張する<sup>6)</sup>。

しかし、かかる快樂の肯定論に対し、古来多くの批判がなされてきたことは、改めて説明するまでもないだろう。エピクロス自身は、そのような事態を予想するかのように、次のようにいう。快樂を必要とするのは、快樂が現に手元にないがゆえに苦痛を感じているときである。もし自足（アウトアルケイア）を大きな善として受け入れるならば、魂の平静がえられ、至福を享受できると主張する。そして贅沢を必要としない人たちこそ、最も頼もしく贅沢を享受するのだという。この見解を受けて、ディオゲネス・ラエルティオスは次のように付け加えてもいる。エピクロスとその友人たちは、きわめてつましい簡素な生活を送っていた。エピクロス自身は手紙のなかで、自分はただ一片のパンと水があれば十分だと述べた<sup>7)</sup>。

他方で、酒甕のディオゲネスの禁欲による自己鍛錬の原理を継承し、さらに洗練させたのが、ストア派の創始者ゼノンである。人間は自然の一部なのだから、宇宙・自然と一致して生きることを人生の目的とすべきだと考える。そのために、万物に広くいきわたっている共通の法、存在するすべてを秩序づける正しい理性と一致和合する状態を実現するように努めることが有徳な行為という。有徳の人は、なすべきことを理性によって洞察することができるばかりか、これを実行することもできる。思慮のある人、勇気ある人、正義の人、節制のある人となる。そのような人が賢者と呼ばれ、彼らだけが自由人となる。つまり、自己鍛錬

5) ロング（2003 [1974]）3-10頁、なお、カール・マルクスによる評価も併せて参照されたい。マルクス（[年不詳] 1976）。

6) デイオゲネス・ラエルティオス（1994）303-304頁。

7) デイオゲネス・ラエルティオス（1994）206頁。

によって、あるべき姿の理想的人間像に接近することを目指して、その完成可能性を信じて、自己鍛錬を重ねることが求められる。したがって、禁欲的な自己抑制が不可欠となるが、高い道徳的目標にまい進する生き方に自己の幸福を託することになる。つまり、禁欲的とはいえ、個人主義の幸福追求のあり方であった<sup>8)</sup>。

『アテネの数日』のストーリーでは、一方の禁欲主義者と称されるゼノンが、快樂の追及は道徳的退廃へとつながり、理想的人間への到達を妨げるとして、快樂を忌避すべき、と主張する。これに対し、他方のエピクロスは、快樂の追及は退廃や墮落ではなく、幸福につながり、かつ道徳と正義の基礎として位置づけられ、洗練された精神的快樂こそ真の精神の静穏を可能にするものとして肯定する。ライトは、おおむねディオゲネス・ラエルティオスの古典的なエピクロス解釈を踏襲して、快樂主義を道徳的退廃に導くとの俗説を否定し、最終的に、エピクロスが論争に勝利し、決着がつけられる。いかにも若い作家らしく筋の運びは簡潔で、ベンサム功利主義の基礎にある快樂思想と道徳観を独自に展開した作品となっている<sup>9)</sup>。

全16章からなる物語の筋立ては単純である。哲学を学ぶためにアテネを訪れたテオン(Theon)と名乗る青年が、その地で繰り広げられた哲学的論争を目撃し、その渦中で過ごした数日のできごととの想定である。この創作上の主人公テオンは、父がクセノクラテス(Xenocrates)派の哲学者で、コリントスから送り込まれた真面目な青年とされている<sup>10)</sup>。物語は古代ギリシャの草稿らしく、プラトンの哲学書ににせて対話風に仕立てられている。論争はストア派を代表するゼノンとエピクロス派を代表するエピクロスの間で行われたという。時は二人の哲学者が存命中とされている。エピクロスが紀元前270年に亡くなっているので、およそ紀元前3世紀中ごろの設定とってよいだろう。

両派の論争では、快樂と徳、快樂と幸福、キュニコス派批判、科学とアート、神への信仰、化学と原子論など、主要な論点がつぎつぎに論じられ、最後にはエピクロス派の勝利で幕が下ろされる。ドラマの流れは複雑ではないが、論争の経緯は単純とはいえない。なぜなら、フランシス・ライトは古代ギリシャのさまざまな学派と哲学者を登場させ、各派の哲学的主張を紹介しつつ、ゼノンとエピクロスの両派の性格を浮き彫りにする方法を用いているからである。筆者には、ライトの作品を評価する能力はないが、イギリスのエピクロス協会はこの作品をこの協会の標準テキストとして採用しているから、ライトのエピクロス理解をおおむね適切であると評価していると考えられる。物語を追うことにしよう。

ドラマ風タッチで描かれている物語は、主人公テオンの叫びとともに始まる。コリント

8) デイオゲネス・ラエルティオス(1989)、中巻、274-275、304、306頁。

9) Wright(1850 [c. 1826]) pp. 83-90; Bentham(1970), pp. 3, 13, 34-37.

10) Wright(1850 [c. 1826]) p. 15.

スからアテネにやってきたこの青年が、ゼノンの館の玄関から、「おお、なんと恐ろしいことか！」と嘆きながら登場する。「おお、神よ！……どうして汝はかくも極悪非道の者ども教師どもの上に雷を落とさないのか？」「ストアの館がエピクロスの庭にとって代わるのか？」と訴える。読者はこの叫びとともに、すぐさま主題にひき込まれていく<sup>11)</sup>。

この青年の義憤は、ティモクラテス (Timocrates) なる人物 (=エピクロス派の元重鎮で、後継者と目されていた哲学者だったが、師を裏切り、ゼノンの仲間に行った背教者) から吹き込まれた言葉にかきたてられてのことだった。ディオゲネス・ラエルティオスによれば、ティモクラテスはエピクロス派の重鎮として実在したが、『歓楽』なる書をあらわして師の快樂主義を批判したという。青年はそれにそそのかされたわけである<sup>12)</sup>。

ティモクラテスの声におびえるように街を歩いていくテオンは、ふと風貌といい、声も、しぐさも、小心の青年の気を休ませる賢人と思しき一人の老人と出会う。挨拶を交わすうちに、テオンは自分がストア派の一人であり、「最も高貴な徳にふれ、じっと見つめると目が眩むほどで、ゼノンを敬愛している……」と告白する。その賢者は、いずれの学派も偏見や偏愛を免れないから、「勇気をもて」と繰り返し、「私はあなたを自信のもてる人にしたい」と応えた。「数え切れない多くの人々が、自分の中にすぐれた種をもっていると私は信じている。……すべての人が詩人になり、哲学者になるわけではないが、誰でも徳のある生き方はできるのだ。」作者はこのセリフに、すべての人間が分け隔てなく価値があり、尊重されるべきであり、有徳な生を送って幸福になりうるのと彼女自身の人間観を込めているように考えられる。こうしてゼノンとは異なった原理を語るうちに、「エピクロスの庭」(The Garden of Epicurus) へと話題を向けて、「私がエピクロスだ」と自己紹介をして、第1章を閉じる<sup>13)</sup>。

あの有名なエピクロスの庭を通して、彼の館に移ると、そこでテオンは意外な光景を目にする。うす暗い室内に、カウチ(肩肘の長椅子)にもたれ、前髪を垂らして本を読みふけている人影に気づいた。よく見ると多くの男性のなかにいる若い女性ではないか。クレタ島出身らしい彼女は輝く目をして、その息づかいから感じられる優しさは生粋のイオニア生まれであった。「あの賢人が彼女のそばに近づき、何を読んでいるのかねと声をかけたとき、彼女は手を下ろし、彼(テオン)の方に目を向けた。なんと落ち着いた表情であることか。……成熟した女性の冷静な品位と尊厳を予示し、歓喜と訓育を示唆する精神の高貴な威厳であった。その容貌はヴィナスではなく、ミネルヴァのそれであった。」そして作者はこの女性の目、鼻、顎やほほの色など顔立ちを細部にわたって描写し、「彼女の身長は並みの女性

11) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 9-10.

12) Wright (1850 [c. 1826]) p. 9.

13) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 12-16, 17-19.

をはるかにしのぎ、四肢と身のこなしはことごとく均整がとれていて、調和していた」とつけ加えている。この女性が「あの有名なレオンティウム (Leontium) ですか」とテオンがつぶやく<sup>14)</sup>。

エピクロスは青年を墮落させ、真夜中に乱痴気騒ぎをすとの評判を、ティモクラテスから聞かされていたテオンは、「ミネルヴァ」に例えて表現されたレオンティウムの虜となった。まさに理想化された女性像であり、ライト自身があこがれる姿であったろう。あえて「並みの女性をはるかにしのぐ身長」に言及したのは、ライト自身の身長が同様に「並はずれ」だったことを意識して、理想化した自分自身の未来像を重ねあわせたのかもしれない。(モリスによればライトの身長は5フィート10インチという。)<sup>15)</sup> その場に居合わせた他の男性たちについては、このように細部にわたって容姿を描写してはいない。つまり、哲学を身につけた知的女性とは、体内から美しさが自ずと輝きをはなつ存在となるはずだとの、フェミニストの作者が想い描いてきた人間像を示したかったといえる。

レオンティウムなる女性は、『ギリシャ哲学者列伝』の著者ディオゲネス・ラエルティオスが伝えるところによれば、古代アテネに実在した「レオンティオン」とい名の遊女であり、メトロドロス (Metrodorus) が身受けし、内妻にしたとのことである。そこでは、女性哲学者であったとは紹介されていない。しかし、「エピクロスの庭」の四人衆の一人、すなわちエピクロスの弟子のなかでも最も中心的な役割を果たしたことから、メトロドロスが「あらゆる面で卓越した人物であった」とコメントをつけた人物である<sup>16)</sup>。

この「アテネの遊女」レオンティオンをめぐる、歴史上エピクロス派に対する評価が二つに分かれることになる。一方は、娼婦を引き入れる道徳的退廃性をなじる側と、他方では、男女を問わず、その過去の経歴や身分などによって人間を差別しない側面を正当化する側との相違である。ドラマの開始早々、作者ライトがレオンティウムを登場させたのは、「エピクロスの庭」への読者の想像を早めに女性の権利の対等性の問題へと誘いたいとの意志の表明であろう。ドラマがすすむにつれ、女性を哲学者として弟子入りすることを認めたエピクロスの先駆性と、そして彼の期待に応じて女性哲学者として男性を凌ぐ活躍をしえたことの証を示すという強いメッセージが、読者に印象づけられるであろう。

次のことも付記しておこう。ディオゲネス・ラエルティオスは『ギリシャ哲学者列伝』のなかで、死期が近づいたエピクロスによる奴隷解放への言及が紹介されている。たとえば、「奴隷たちのうち、ミュスとニキアスとリュコンとは解放してやること。また、(女奴隷の) パイドリオンも自由の身にしてやること」など。その言及が歴史的事実として確認されるか

14) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 24-25.

15) Morris (1992 [1984]) p. 5.

16) ディオゲネス・ラエルティオス (1994) 203頁。

否か定かではないが、古代ギリシャの文献に記され、エピクロスが再発見されたのちに、この文章の存在が否定されなかったということは注目に値する。エピクロスの哲学は、女性や奴隷など、虐げられた人々の解放を唱える理念をかかげるものと、ライトが理解したことを意味しているであろう。

## 2. 『アテネの数日』(2)——快樂・徳・幸福

本書の第3章では、ストアとエピクロス両派の徳の比較がはじまる。徳の考えがひどく異なっていると気づいた青年テオンの驚きに、エピクロスは「ゼノンの原理は高尚で、ゼノンの学園からはたくさんの偉大な人間が輩出されるだろうが、私のところからは温和な社会(an amiable world)が生まれるだろう」と応える。ゼノンの館でも、ピタゴラス学派でも、あるいはディオゲネスの酒甕のなかでも、教師は徳を考えよという。これに対して、「エピクロスの庭」では幸福が語られるという。両者を対比して徳と幸福の位置づけの違いに気づかされ、「徳は幸福ではないのか、幸福は徳ではないのか」との問いを突きつけられる。「われわれは誰でも徳の求愛者であるが、異なった性格の徳の求愛者である。」<sup>17)</sup>苦痛は最大の害悪であるとの考えが示され、苦痛が害悪であることを否定するならば、その存在を否定することよりも、もっと不合理なことである。つまり、魂が憩うとき快く感じるので、苦痛という好ましくない感情が起これば、心が乱され、安楽を失い、制御できない欲望で心身が乱されるからであるという。

「人間の目的は感覚を満足させること、すなわち快樂と幸福を求めるものである。もしそこへ導かないとすれば、徳といわれるものでも避けなければならない。」徳が最高の快樂でもなければ、悪徳や制御できない情念や欲望が最高の悲惨でもない。他の快樂が幸福という完全な安楽な状態を生み出すために欠かせないし、その他の悲惨さが最も有徳で最も賢明な人の心の平静さを煩わせ、壊してしまうかもしれないのだ<sup>18)</sup>。

快樂と幸福の関係について、もう一つの重要なテーマ、「正しい知識」をいかに獲得するかという問題に移っていく。悪行を避けるためには、「正しい知識」にもとづいて自分で判断することを学ぶ必要があるとエピクロスは指摘する。なぜなら「信じ込みやすさ(credulity)はいつでも愚かしく、しばしば失敗する危険を伴う」からである。自分の感覚器官で受け取ったものこそ、自分にとって最も確かなものに違いない。それを基礎にして、自分が疑問に思う事柄について、自分の意見をもつべきだとされる。

しかし、作者は語っていないのだが、自分の考えた意見が正しいとは限らないという疑問

---

17) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 37-40.

18) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 40-41.



が残る。エピクロスは、他人の講義によって得られる知識よりも、学園の仲間との対話から生まれるそれの方がより良く、正しいという。対話を重視するソクラテスの伝統の重要性の指摘である<sup>19)</sup>。まず「信じ込みやすさ」を否定することによって、権威の指示にやすやすと従うとか、他人の言動に安易に動かされることをたしなめる<sup>20)</sup>。それは各人にとって、自分の感覚器官が受け取った感覚こそが最も信頼できる情報であって、それを基礎にした自分自身の思考と判断に従って行動することの大切さを説き、対話を通じて相互に尊重しあうルールを確かなものとする個人主義の表明であり、対話による共感の輪が広がることへの期待が感じられる。このような「信じ込みやすさ」の否定は、次の課題、信仰への懐疑と自立の精神への訴えの論点の提示なのである。

エピクロスとテオンは対話を続けながら紀元前4世紀の有名な画家たちのコピーが飾られている部屋に入る。そこには、アペレス (Apelles) の見事なオリジナルの絵があり、中央には、リュシッポス (Lysippus) の手によるウラニアのヴィナスの彫刻が、有徳な快樂の庭の神聖さを象徴するかのように立っていた<sup>21)</sup>。部屋のなかでは、メトロドロスが壁に寄りかかったレオンティウムをうまく表現できないと嘆きながら鉛筆で描いている。そこにエピクロスとテオンが加わり、4人はこの学園での生活のなかで、絵画や音楽などの芸術についてユーモアをまじえて楽しく語り合う<sup>22)</sup>。主要な哲学論争が挿入されたこのシーンには、実は重要な意味が込められている。その点は後ほど振り返ることにしよう。

楽しいひと時が過ぎていくなか、突然緊張が走る。「エピクロスの庭」へキュニコス派のグリフス (Gryphus) があらわれ、論戦を仕掛けてきたからである。第4章では、ストア派の母体となっていた古い形のキュニコス派が批判の対象となる。酒麴に住んでいたといわれるディオゲネスに象徴されるこの派の人々は、犬のような生活をすることから、「犬儒派」の異名で呼ばれてきた。世間の評判に耳を貸さず、徹底的に世俗的な善に背を向けて厳格主義を唱えることもあって、その倫理は愚かしい知恵者の生き方として否定される<sup>23)</sup>。

一方で、キュニコス派が自慢・野心・虚栄のように榮譽を願うことは、悪徳に通じ、人を不幸に導く危険があると懸念していることに、エピクロスは同意する。しかし他方では、正当にえられた名誉は何よりの快樂と肯定している。その名誉を手に入れる権利は、われわれエピキュリアンの民主的なやり方ではだれにも認められており、偉大な人々が大事という立派な目的をもつことを認めてもいとされる。キュニコス派の批判を経て、次のようにエピ

---

19) Rosen (2003) p. 10.

20) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 41-42.

21) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 42-43.

22) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 43-47.

23) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 48-53.

クロスはテオンを導く二つの見解を披露する。一つは、知恵と真の哲学の目的は、自分が所有している能力にふさわしい範囲にとどめることが適切であると説いて、静寂思想を暗示する。もう一つは、多くの人が優れたものを持っているとの指摘である。幸福への道が、賢人の哲学を経て、すなわち理性に従って、禁欲に耐えて、自己啓発ができるエリートでなくても、すべての人々へ開かれていることを示唆している。それはエピクロス哲学が、ありのままの人間を観察し、対象として論じられていることに由来しているといえるだろう<sup>24)</sup>。この対話を経てなお、テオンはエピクロス派が正しいと納得したわけではない。「ゼノンは今でも私の師だ」といい、再びゼノンの館に戻ろうとする。

第5章では、徳と快樂が結びつき幸福を実現するかが問われる。快樂論と呼ばれるエピクロス哲学の核心部分についての議論がはじまる。快樂追求が墮落によって幸福を妨げるものへとつながるか、あるいは快樂は徳へ通じて幸福を導くのか、それは功利主義哲学の主要テーマの議論でもある。ゼノンの弟子クレンテスが、「徳は快樂や穏和からは生じることはない。抵抗し、献身し、集中し、耐え忍び、努力すること、これらを自ら実践し、……やがて人間の本性が完成するのだ」と、ゼノンの哲学の核心を語る<sup>25)</sup>。ドラマではここでゼノンが登場する。

さらに第6章でも、ゼノンの道徳に関する説教が続く。「正直な友人や高潔な学派をけなすような表現や考え方の一切を諸君の顔や心から捨て去りなさい。なぜなら、たとえ虚偽と悪徳を蔑視することは立派な態度といえるが、真理と清浄を信じないことは卑劣なことなのだと覚えておくがよい。……」ゼノンの説教に弟子たちは感銘を受け、「道徳がなんと偉大で、莊嚴の高みへと昇っていくことかを知った……」と賛美する。こうして邪悪な理性とみられる感情による過激な衝動を抑制し、完全で動揺のない精神状態へ到達するとのストア派の完成可能性論が披露される<sup>26)</sup>。

### 3. 『アテネの数日』(3)——アートと科学

第7章で再びエピクロスが姿を現し、人間論の比較が試みられる。崇高なゼノンは「人間をあるべきものとみる」のに対し、寛大なエピクロスは「あるがままの人間をみるのであって、あってほしいと願う人間をみるのではない」という。「あらゆる弱さを抱え、誤りを犯し、罪深いもの、同じ仲間を支えられ、安楽を楽しみ、不幸を嘆くものたちよ、私はこの庭から思慮を欠くもの、強い意志をもつもの、怠けものたちに声をかけるのだ」といいつつ、「どこをさまよひ、何を求めようと、……ここにきて身体を休めなさい」と声をかけ、情念をし

24) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 54-59.

25) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 66-67.

26) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 77-81.

ずめ、疲れをいやすことを勧める。そのために、科学の不思議な扉を開き、アートの美を楽しむ、歌を歌い、竖琴を奏で、ダンスを舞うことなどの行為が勧められる<sup>27)</sup>。

エピクロスは、現実の生きた人間、感情や欲望を抱いて、たえざる変化のなかに生きる人間を肯定することによって、快楽・安楽・欲望を求めて行動する生身の人間の「あるがまま」の姿を是認することになる。特に、激情から発する強烈な快楽よりも、安寧・安楽の静穏な癒しが幸福感を満たすことに注目している。これに対し、ストイシズムにあっては、理想像に接近するためには、自然的欲望からの逃避あるいは抑制が避けられず、かえって激しい情念の働きによって逃避や抑制を求めさえもする。エピクロスは、「私は人間を偉大にするのではなく、幸福にすることを目指すことを是認する」と述べ、静穏な状態を幸福の最高の到達点とする価値観へと議論が進められていく<sup>28)</sup>。

科学とアートとが幸福の実現にとって何を意味するか、第8章から第14章にかけて論じられる。アートと科学の追及が、相互に矛盾することなく、いかに幸福へつながるかの説明がはじまる。快楽の追及が物的欲望の肥大化をうながし、退廃につながりやすいとの懸念は、古代から現代まで繰り返し論じられ、快楽論への批判の第一の根拠とされてきた。エピクロス哲学はこの課題へ挑戦したおそらく最初の哲学であろう。フェミニストとして、フランシス・ライトは、自己の感性に従って自由に生きる自己決定の重要性を認識していた。だからこそ、エピクロスの快楽論を素直に受容することができただろう。

ライトはその課題への回答を二つの側面から説明しようとしている。第一は、アートの推奨である。第二が、アートを科学と結びつけることの必要性を説いている点である。自然（世界＝コスモス）の成り立ちやその構造を解明し、そこで働く自然の法則を理解することによって、人間が迷信や偏見から解放されることが、幸福実現にとって不可欠であるとの主張である。ドラマでは、第一の点は、音楽、ダンス、作詞、絵画が哲学に生かされると知らされる。官能的音楽や絵画など、みだらな快楽への誘因を非難し、退廃的ではないアートの文化が推奨される。つづいて、第二の点を説いて、物理学の秘密や倫理学の美しさを開き、人間の行為の活力を明らかにし、さらに人間の精神の研究に導くことが必要であるという<sup>29)</sup>。そのためには、「ただ確実な知識だけがわれわれを改善し、幸福に……する」と強調する。しかし、「もっと有益で、もっと興味深く、もっと美しいものは完全な知識と完全な自己管理である」ともいう<sup>30)</sup>。

ライトによる指摘は、素朴であるが、すでに1770年代の末には、アート (art) と科学

27) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 88-90.

28) Wright (1850 [c. 1826]) p. 90.

29) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 108-110.

30) Wright (1850 [c. 1826]) p. 115.

(science) の関連の問題は、ジェレミー・ベンサム功利主義哲学の基礎理論として、洗練され、精緻な議論として展開されていた<sup>31)</sup>。さらに、ウィリアム・トンプソンやJ. S.ミルによって高度な質的快樂の議論へと展開されることは周知である。そして注目すべきことは、快樂の質の区別について、これまでミルの功績が高く評価されてきたが、この区別にもとづいて、「高尚な快樂」の議論を進めたのはトンプソンであったことを改めて確認しておきたい<sup>32)</sup>。功利主義の快樂論の理解にとって、最も重要な要点の一つは、快樂が有徳につながるか、墮落へとつながるかという古代から現代までつづく議論である。ライトはこの小説で、エピクロスの中にその答えをみつけるとともに、それが静穏な生活を通じて、安楽（アタラクシア）へ通じることを示唆している。この生活様式への共感がベンサム、トンプソンそしてJ. S.ミルらへエピキュリアニズムへの志向をうながしたと考えられる。

#### 4. 『アテネの数日』(4)——神への信仰について

第13章から本書の最も重要なテーマである神への信仰の是非をめぐる議論がはじまる。信仰は幸福と乖離しないか、非難されるべきか。第14章で、エピクロス哲学の伝統は科学の重要性を認めることであり、神の存在を確認するためには、科学的解明が必要であると強調される。「神を見たことがあるか」との質問が発せられても、感覚的な証拠を示すことはできない。なぜなら、視覚的・感覚的に示威できるもの以外には、その存在を確認しうる手段はないからである。このスピリッツは不信心か無神論に至るであろうと示唆される<sup>33)</sup>。テオンは自ら「真理とは何か」との疑問を発し、「確実なる事実」との答えを用意するが、人間は真理を喜んで信じるか否かの能力をもっているか大いに戸惑いを感じてしまう。

しかし、第15章の冒頭で、混乱したテオンの心に一筋の光がはしる。にわかに、暗闇に潜む「エピクロスの庭」の原理の深遠さに気づかされる。その原理が、「もし理性と一致しせず、徳と和解できないというのであれば、私はそれらの誤った推論を見破れるだろう」と確信するようになる。この章は、真理は単純・明確な用語で表現されるものであって、曖昧な神秘的な言葉で飾り立てられるものではないことを確認する。真の哲学を見つけだす方法は観察であり、哲学は「観察の科学」として位置づけられる。人間のいない世界と人間を含めた世界について、あるがままの事物を偏見から自由な健全な感覚によって観察すること、次にその構造を検討して、独自の特性を確認することとし、そして他の事物と比較・関連させると

31) Schofield (2006) pp. 9-13. ベンサムによる言語論に含まれる現実態・仮想態の理論を含む説明は、やや難解であるが、ベンサム功利主義の革新的な部分への要約であり、ライトは彼との会話の中でいつか教えられていたものと思われる。

32) 土方 (2011) 62-64頁。

33) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 160-162.

いう。この説明をするのは、女性哲学者レオンティウムである<sup>34)</sup>。

観察者の向上とその多様化によって、感覚・感情・思想など物体世界とは異なる精神世界で生じる事象を観察・精査することが可能となるという。その研究範囲は自然現象の哲学と精神の哲学の二つの領域にまたがっている。また、あらゆる現象の根源には、物質の運動とその性格が働いていることが確認できるとレオンティウムは主張する<sup>35)</sup>。

つまり、外的世界の生命体からであれ、非生命体からのものであれ、感覚器官で受け止められた感情や意識が、それなしには精神活動を構成することができない不可欠の要素であること、そして人間の肉体の一部である感覚器官も物質によって構成されており、それらすべてが物体を基礎として成り立っているとの主張である。

こうして、いよいよ万物の創造主とされる神の存在の確認へ議論が進められる。「世の中を統べおさめる摂理や偉大なる第一原因の信仰」は証拠にもとづく信念なのか、証拠にもとづくとするれば、その真偽はいかに。二つの疑問が提示される。第一に、それは道徳的真理のはずがない。なぜなら、人間の行為の結果から論理的に推測されないからである。第二に、それは自明の真理ではない。なぜなら、すべての精神にとって自明ではなく、しばしばそれを検証すればするほど不明確となるからである。「見て、聞いて、感じるすべての存在は、感覚にはっきりと刻まれる。この存在によって作りだされる信念は直接的で、直観的である。」第一原因の存在は感覚にはっきりと示されず、したがって直接的でもなければ、抵抗なく受け入れられるものでもないと否定される。そこで議論は原因と結果についての連鎖に移り、「自然現象をさらに研究すれば、最後の原因となる第一原因はない。つねに原因は結果を生みだすに違いない」という<sup>36)</sup>。

第15章の末尾に、長文の「訳者の註」が挿入されている<sup>37)</sup>。この章に込められた作者ライト自身の意図のエッセンスがそこに綴られている。その要点は近代の自然科学と精神科学の発展の軌跡をみると、エピクロス哲学が指導原理となって働いているという主張である。次の文章で書きはじめる。「なんと素晴らしいことか、化学、自然哲学における諸発見そして人間精神のこれまでにない正確な分析——古代世界では知らなかった諸科学はエピキュリアンの倫理と自然学が指導的原理であることを実証してきたではないか。」一般に、このような指摘をする場合、総称としての「科学」から入るのが通常であるが、冒頭で「化学」と指摘していることは興味深い。この時代、酸素の発見により有形の物体が「元素」によって構成されていることが明らかとなり、「化学」への関心が高まったことを反映している。フラ

34) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 171-172.

35) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 172-173.

36) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 176-177, 185-187.

37) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 188-190.

ンシス・ライトからすれば、まさにエピキュリアンの「原子論」の正当性が「化学」の発展によって証明されたことを意味していると理解できたであろう。また、物体を分解して、最も微細な目に見えないエレメントに注目し考察すれば、それらの原子の永遠不変の性質に達するほかはないと述べ、引力、斥力、電気、磁気などの例を加えて、あらゆる存在の単純なエレメントのなかに宿る物体の不思議な性質に言及している。産業革命の時代、ジョセフ・プリーストリ（Joseph Priestley, 1733-1804）が酸素を発見して30年ほど過ぎて、物質の究極の基体としての分子が想定されていた時期の発言である。

この議論はさらに倫理学へと敷衍されている。「精神的哲学に目を移せば、われわれの精査はエピキュリアン倫理学に導かれざるをえない」として、快樂、功利、人間的行為の作法、人間のさまざまな行為、すなわち善や悪を推し進める性向のなかに、内在的なメリットあるいはデメリットがあるかどうかだけを常に判断しなければならない。このエピクロスの指導的な原理の真理性は、長い間、すべての健全な理性的人間の間で受け入れられてきたと述べる。この原理にもとづく幸福論については、功利主義者の道德論を検討する際に改めて言及することにしよう。

いよいよ最終章（第16章）にいたって、フィナーレにふさわしく「エピクロスの庭」に全員が集まり、エピクロスが人々の前へ進み出る。そこでの議論は、人間にとって最も重要な幸福論の検討である。まず、その前提として、彼は次の二点を確認している。一つは、哲学的探究の真の目的のために、自然の研究に向かわねばならないが、想像力や理論からではなく、自分の目を使って、あるがままに事実を観察し、判断しなければならないとの認識論の立場を表明する。他の一つは、原因と結果の連鎖は物理現象でも、道德の分野でも生じるので、ミステリーは存在しないという科学的方法の表明である<sup>38)</sup>。

そして再び幸福論へ踏み込んでいく。他のいかなる被造物よりも楽しむことができる能力をもっている人間が、苦悩と犯罪において他のすべての存在よりもひどい苦しみを負っている。この愚かさの主な動機は何か。悪の最初の環は「宗教にある」と声高に宣言する。集会の一部ではざわつきが起るが、すぐに静寂にもどる。「われわれはこの人間精神の主要な誤謬、幸福の破たん、徳を邪道に誘うものと名づける。それが宗教なのだ。……」賢人エピクロスはなおも宗教へのこのような非難を繰り返し、邪悪と悲惨の根源に横たわるものと語っている。このような激しい攻撃によって、宗教批判がこのドラマの中心テーマだったことを作者は闡明する<sup>39)</sup>。

「宗教の本質は不安である。なぜならその源泉が無知だからである」と述べて、この状態

---

38) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 192-195.

39) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 197-199.

から逃れる道を次のように示唆する。観察の範囲を広げて、自然現象と関連させて調整することによって、奇跡の数が減り、超自然的動因が減少し、合理的思考力を養うことが求められる。そのようにすれば、学識が増え、盲目的崇拜から逃れて、徳と理性の特性を備えたはるかに高貴なものを信じるようになるし、最も価値ある特性をもって、善性に従うようになるろうと示唆する<sup>40)</sup>。

もはや複雑な道徳論は不要であるかのように、フィナーレは単純な説教で締めくくられる。「エンジョイして、幸福であれ！……エンジョイメントの源泉は何もかもあなた自身のうちにある！」そして「人間という自然すなわち生命の科学をさらに探求すべし」と語られる<sup>41)</sup>。既成の宗教への弾劾によって、無神論と快楽主義的幸福論が勧められ、すべて都合よく解決され大団円となる。

まだ売神罪に人々がおびえていた時代のドラマとしてペンを走らせたフランシス・ライトの思想の核心は、エピクロス哲学を借りた宗教批判であった。古代ギリシャを想定することによって、直接にキリスト教を批判することが避けられ、特定の宗派や教会を非難・侮辱することも免れていた。売神罪としての告発を免れた理由は、このあたりにあったのかもしれない。

## あとがき

フランシス・ライトのこの作品は20代の女性が執筆できたのかという疑問がわくほどの出来栄であった。最初の反応と思われる記録は、この本をアメリカ独立革命の同志であったラファイエットから寄贈されたトマス・ジェファーソン (Thomas Jefferson, 1734-1826) が残している。7ページに及ぶ抜粋とそれへのコメントをノートに記し、持ち歩いていたというのである<sup>42)</sup>。若い女性の作品にしては出来すぎで、共同執筆者がいるのではないかとの疑念が生じたとも伝えられている。

噂にあがったのは、両親の早逝によってみなしごとなったライト姉妹を引取って、養育した大叔父のジェームズ・ミルン (James Mylne, 1757-1839) である。ミルンについては、別稿においてフランシス・ライトの生い立ちについて述べた際、かなり詳しく言及したのでそれを参照されたい。彼はアダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) の後継者の一人で、グラスゴウ大学の道徳哲学の教授であった。ミルンのグラスゴウ大学の講義ノートにエピクロス哲学についての記述が残されており、彼が何らかの示唆と援助をあたえたかもしれないことは大いに予想されるところである。同居していた彼女たちとエピクロス哲学について語

40) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 203-205.

41) Wright (1850 [c. 1826]) pp. 212-213.

42) Morris (1992 [1984]) p. 66.

りあった可能性は高いだろう。すでに別稿において、ライトとミルンの関係について言及しているのでここでは詳述をさけるが、ミルンは長年にわたり礼拝堂で布教活動を行った信仰心のあつい人柄と考えられる。情報としての哲学的会話があったとしても、既成の宗教を根底から否定する文章の手伝いをしたとは考えにくい<sup>43)</sup>。

この小説で語られた哲学は、すでに述べたように、ジェレミー・ベンサムの功利主義と多くの共通点がある。ベンサムが共同執筆者ではないかとの噂があがっても不思議ではあるまい。だが、この想定には無理がある。この二人が最初に会おうのは、出版の前年9月、それ以来6カ月しか経ていないし、この間、出版の最終作業を行ったベンサム邸滞在は2回である。しかも、この時期はベンサムにとって人生で最も多忙な時期だったと考えられる。この点も別稿で詳細に検討したように、ベンサムの大事業すなわちスペインとポルトガルの憲法起草を働きかけ、ついにポルトガルからは執筆依頼までこぎつけ、その作業に集中しなければならなかった<sup>44)</sup>。この小説は彼女自身による創作と結論してよいだろう。

ベンサムの功利主義思想を17世紀以降のエピキュリアン伝統のなかに位置づけて理解することを提起しているのがフレッド・ローゼンである。『ヒュームからミルにいたる古典的功利主義』(*Classical Utilitarianism from Hume to Mill*, 2003)において、ローゼンは重要な問題提起をしている。主として次の三点を検討している。第一は、近代功利主義哲学を構成する要素、たとえば快樂論・正義論・幸福論・平等論などの淵源が、古代ギリシャのエピクロス哲学に発していることを確認して、エピクロスの唱えた原理がいかに近代哲学・思想のなかに取り入れられているかを明らかにする試みである。第二は、17世紀、ピエール・ガッサンディ(Pierre Gassendi, 1592-1655)によるエピクロスの再発見と復興を契機としてはじまる潮流を、「エピキュリアン伝統」として把握することの重要性の指摘である。第三に、そのことを前提として、18世紀スコットランド啓蒙と19世紀のベンサムおよびJ. S. ミルの功利主義哲学を「エピキュリアン伝統」のなかの継承関係として理解することの必要性を強調したことである。ローゼンは言及していないが、筆者はライトやウィリアム・トンブソンもこの流れのなかに入っていたことを確認しておきたい。従来、「エピキュリアン伝統」と功利主義哲学の連結性を理解することは、多くの研究者によって一般的でなかったから、今後、この問題提起はこの時代の研究全般に影響をあたることになるだろう。

ローゼンのこの著作の注記に興味深い指摘が記されている。「ベンサムは若いころ、自分の哲学がエピキュリアニズムと関連していることをあからさまに認めることを避けていたようにみえる」という。彼が態度を変えたのは、フランシス・ライトが『アテネの数日』を彼

---

43) 土方(2018)490-492頁。

44) 土方(2019)第3節。



に献呈してから後のことのように思われると推測している。文献的に確認することは難しい問題ではあるが、ライトの貢献として、関心が寄せられるであろう。

#### 参考文献

- エピクロス [年不詳] 出隆・岩崎允胤訳 (1959) 『エピクロス—説教と手紙—』(岩波文庫) 岩波書店  
 ディオゲネス・ラエルティオス (1989・1994) 加来彰俊訳『ギリシャ哲学者列伝』中・下 (岩波文庫) 岩波書店
- 土方直史 (2011) 「ウィリアム・トンプソンにおける功利主義と経済思想」音無通宏編『功利主義と政策思想の展開』(中央大学経済研究所研究叢書51) 中央大学出版部, 31-81頁  
 —— (2018) 「フランシス・ライトの生い立ちと『アメリカ社会とマナーについての考察』—イギリス・フェミニズム誕生の背景をさぐる—」『中央大学経済研究所年報』第50号, 483-511頁  
 —— (2019) 「『世界の立法者』ジェレミー・ベンサムとフランシス・ライトの出会い—1820年代イギリス・フェミニズムの背景をさぐる—」『経済学論叢 (中央大学)』第60巻・第2号, 135-154頁
- マルクス, カール [年不詳] (1976) 「エピクロス派, ストア派, および懐疑派の哲学へのノート」『マルクス-エンゲルス全集』(マルクス初期著作集) 第40巻 大月書店
- ルクレーティウス [年不詳] 樋口勝彦訳 (1961) 『物の本質について』(岩波文庫) 岩波書店
- Bentham, Jeremy (1970 [n.d.]) *An Introduction to the Principles of Moral and Legislation*, eds. J. H. Burns and H. L. A. Hart, *The Collective Works of Jeremy Bentham*, Oxford, Clarendon Press (ジェレミー・ベンサム (1979) 山下重一他訳「道徳及び立法の原理序説」関嘉彦編『世界の名著』第49巻 (中公バックス) 中央公論社)  
 —— (1998 [n.d.]) 'Legislator of the World': *Writings on Codification, Law, and Education*, eds. P. Schofield and J. Harris, *The Collective Works of Jeremy Bentham*, Oxford, Clarendon Press  
 —— (2006 [n.d.]) *First Principles Preparatory to Constitutional Code*, ed. P. Schofield, *The Collective Works of Jeremy Bentham*, Oxford, Clarendon Press  
 —— (2012 [n.d.]) *On the Liberty of the Press, and Public Discussion, and other Legal and Political Writings for Spain and Portugal*, eds. C. P. W. Watkin and P. Schofield, *The Collective Works of Jeremy Bentham*, Oxford, Oxford University Press
- Dooley, Dolores (1996) *Equality in Community: Sexual Equality in Writings of William Thompson and Anna Doyle Wheeler*, Cork, Cork University Press
- Long, Anthony A. (1974) Gerald Duckworth & Co. Ltd. (A. A. ロング (2003) 金山弥平訳『ヘレニズム哲学—ストア派, エピクロス派, 懐疑派—』京都大学学術出版会)
- Morris, Celia (1992 [1984]) *Fanny Wright: Rebel in America*, Urbana and Chicago, University of Illinois Press
- Perkins, A. J. G. and Wolfson, Theresa (1972 [1939]) *Frances Wright, Free Enquirer: The Study of a Temperament*, Philadelphia, Porcupine Press
- Rosen, Frederick (2003) *Classical Utilitarianism from Hume to Mill*, London, Routledge
- Schofield, Philip (2006) *Utility and Democracy, The Political Thought of Jeremy Bentham*, Oxford, Oxford University Press
- Thompson, William (1825) *Appeal of One Half the Human Race, Women, Against the Pretensions of the Other Half, Men, to Retain Them in Political, and thence in Civil and Domestic Slavery*,

London, Longman Hurst Rees, Orme, Brown and Green  
Wright, Frances (1850 [c. 1826]) *A Few Days in Athens, Being The Translation of Greek Manuscript Discovered in Herculaneum*. Boston, Published by J. P. Mendum. (By Frances Wright, Author of "Views of Society and Manners In America," "-joining bliss to virtue the glad ease Of Epicurus, seldom understood." [Dedication] To Jeremy Bentham, As a Testimony of her Admiration of his Enlightened Sentiments, Useful Labours, and Active Philanthropy, and of her Gratitude for his Friendship, This works is Respectfully and Affectionately Inscribed, by Frances Wright, London, March 12th, 1822)

\* 土方直史名誉教授の執筆された本論稿は、先生が2020年10月1日に逝去されるわずか1週間前に、思想史研究会幹事に託された研究成果で先生の遺稿となりました。先生は本論稿の校正をご息女の真嶋史叙様（学習院大学教授）に託されることもお決めになっていました。ロバート・オウエン研究の第一人者である土方先生は、近年、スコットランド生まれの女性哲学者フランシス・ライト（Frances Wright, 1795-1852）の研究に精力的に取り組まれていました。2018年2月に中央大学経済研究所「思想史研究会」・同社会科学研究所研究チーム「暴力・国家・ジェンダー」共催の公開研究会にて「F・ライトのフェミニズムの背景としてのスコットランド啓蒙思想—ジョン・ミラーの女性史論を中心に—」を報告されました。ついで、2018年10月発行の中央大学経済研究所年報第50号に、論稿「フランシス・ライトの生い立ちと『アメリカの社会とマナーについての考察』—1820年代イギリス・フェミニズムの背景をさぐる—」を発表されました。この論稿について先生は、フェミニズム史を再検討するための序論的性格を持つものと記されています。さらに、2019年には『経済学論纂（中央大学）』（第60巻第2号）に論稿「『世界の立法者』ジェレミー・ベンサムとフランシス・ライトの出会い—1820年代イギリス・フェミニズムの背景をさぐる—」を発表されました。そして本論稿の執筆へと続きます。病床にあっても最期まで研究に真摯に向き合われ、論稿を残してくれたくださった先生に心からの敬意を表したいと思います。（思想史研究会幹事・鳴子博子）